

現代史における時間感覚

事件・歴史家・読者の間の対話における距離感

塩川伸明

● 東京大学大学院法学政治学研究科教授

1

「歴史とは現在と過去の対話である」(E・H・カー)という有名な言葉は、何度となく多くの人によって引き合いに出され、陳腐な決まり文句とさえなっている。しかし、その「対話」における「現在」と「過去」の時間的な距離感という問題については、これまであまり眼が向けられていないように思われる。

歴史研究の対象たる「過去」が「現在」からどの程度遠いか／近いかは、「対話」がどのような距離を隔ててなされるかに関わり、従ってまた、歴史家(現在)が対象(過去)をどのようなペースでテクニヴのものとして捉えるかに関わる。もつとも、遠近の差異といつても所詮は相対的なものだし、どんなに遠い過去であろうとも、われわれ(＝現在)からの問いかけによって「対話」としての歴史研究が始まるという限りでは、「全ての歴史は現代史である」(クローチェ)ということになる。だが、それにしても、相対的な距離の遠近という問題がなくなるわけではない。

手前味噌になるが、数年前に出した旧著で、現代史の特徴について考えた際に、次のように指摘したことがある。

現代史にあつては、対象(過去)と自己(現在)の関係が短期間に大きく変わり、それに伴つて「現在と過去の対話」のあり方も変わらざるを得ない。たとえば今から千年前の出来事は、十年くらい経つても、それが一〇〇年前だろうが一〇一〇年前だろうが、遠い過去であることに変わりはなく、特に距離感の変化が生じるわけではない。これに対し、今から一、二年前の出来事は、十年経つて「十数年前の出来事」ということになれば、距離感が相当大きく変わる。

世代差との関係も無視できない。遠い過去に関する歴史は、今日生きていく誰にとつても等しく遠い過去である。たとえば今から千年前の出来事は、今日の若者にとつても年寄りにとつても、「自分が生まれるよりもずっと前だ」という点では共通している。これに対し、ここ数十年の間の出来事は、年長世代にとつては自らが直接体験した「同時代史」だが、より若い世代にとつてはそうでないという、大きな差異がある。

ARENA



2010

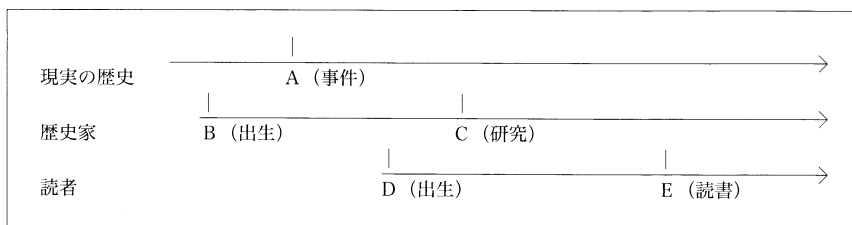


図1

いま引いた旧稿は「現代史における時間感覚」という問題について考えようとしたささやかな試みだったが、そこで萌芽的なものにとどまっていた思いつきを多少なりとも発展させてみたいというのが、今回の小文の狙いである。

先の引用の第一段落は、歴史研究の対象（過去）と歴史家（現在）のあいだの時間的な距離感が、短期間のうちに大きく変わっていく——「一、二年前」から

「十数年前」へ——ということに関わるのに対し、第二段落は歴史家と読者の世代差——年長の歴史家にとって「同時代史」である事柄が、若い読者にとってはそうでない——に関わる。図式的にいうなら、「事件」「歴史家」「読者」の三者の間には図1のような相互関係があり、それぞれの距離感が短期間に変わってくる——そしてそのために、それらの間の「対話」のあり方も変わってくる——ということになるだろう。

まず、AとB・Dの関係いかんによって、たとえばこの事件は当該歴史家にとっては成人になってから見聞したものだが、読者にとつては生まれる前の出来事だというような違いが生じる。ここまでは、いったんある事例を取り上げれば一意的に定まることだが、CやEがいつ行なわれるかは、同じ人であってもいろいろな可能性がある。歴史家は事件の直後に研究に取りかかることもあれば、ある程度時間が経ってから取りかかることもあるが、そのどちらであるかに応じて、AC間

の距離が相対的に短かかったり長かかったりすることになる。こうした時間的距離の長短が対象の見え方（パースペクティブ）に影響することはいうまでもない。また、研究作業は一挙に完成するものではなく、かなり長い時間をかけて遂行されることがよくあるが、そうするとCの作業が行なわれているうちに、AとCの間の距離がどんどん開いていくことになる。歴史家は、対象との間の距離感の変化という問題を抱えながら「対話」作業を続けることになる。

次に、読者はEという時点で立つて、A（歴史的事件ないしその登場人物）およびC（歴史書ないしその書き手）と対話を交わすわけだが、それがどの時期に行なわれるかによって、かなり異なった距離感をほらんだ対話となる。歴史家の方も、歴史書を書きながら何らかの潜在的読者を念頭におき、その仮想的読者との対話をするだろうが、これはCという時点で立つて、一面でAと、他面でEと対話するということになる。

こうして、事件・歴史家・読者の三者の間で複合的な対話が遂行されるのだが、それは世代差（BとDの差）およびAC間、AE間、CE間の様々な時間的距離の違いをはらみながらの対話である。このこと自体は現代史に限らず歴史一般に当てはまることだが、時間的距離感およびその意味が一樣でない——たとえば一〇年とか二〇年という時間をとってみるなら、そのもつ意味は、若い世代にとつてと年長世代とで大きく異なる——し、対話が試みられている間にこれらの時間的距離感が急速に移り変わるといふ事情は、現代史に独特な問題である。こういった事情が、現代史に関する対話を特に困難なものにするということができよう。このことへの万能の対処法はないが、少なくとも、いま述べたような時間的距離感の問題——自分がどのような時点で立つて、どのような相手と、どういう距離を隔てた対話を交わそうとしているのか——をできるだけ明晰に自覚化することは、対話を実り多いものにするための一つの重要な条件をなすと思われる。

このようなことを私が考える一つのきっかけとなったのは、ハンナ・アーレントの『イェルサレムのアイヒマン』³⁾を遅ればせに——刊行後半世紀近くを隔てた二〇〇九年に——読み、ホロコースト・アイヒマン裁判・同書の相互関係について考えたことである。アイヒマンとアーレントはともに一九〇六年生まれであり、完全に同時代人である。ドイツ生まれのユダヤ人であるアーレントが亡命地でホロコーストを、生死に関わる重大な関心をもって、いわば固唾をのんで同時代的に見守っていたであろうことは疑う余地がない。一九六一年にアイヒマン裁判が開かれたとき、彼女は自ら志願して『ニューヨーカー』誌の特派員となつてこの裁判を傍聴し、その経験に基づいてこの本を六三年に刊行した。つまり、この本は、ホロコーストに関しては約二〇年後の省察、アイヒマン裁判に関してはリアルタイムの観察という二重の視点から書かれていることになる。ホロコースト研究が——同書の少し前にヒルバーグの大作が出ていたとはいえ⁴⁾——あまり進行していなかったその当時には、「歴史としてのホロコースト論」はまだ条件が熟していなかったというべきだろうし、ましてアイヒマン裁判の実況報告的に書かれた同書は、「歴史」というよりはむしろ、その時点における「現状」に関わるジャーナリスティックな評論としての性格を帯びていたと考えられる。しかし、後世の立場から見れば、これを「歴史（とりわけ現代史）」の書として読むことも可能である。もつとも、アーレントは歴史家ではなく政治哲学者であるから、専門的な歴史研究の観点からあれこれの欠陥をあげてらうのはあまり生産的ではない。その点を留保しつつ、ともかくこれを一個の歴史書として読む時に本書がどういう相貌をあらわすか、その点に私は惹かれた。⁵⁾

アーレントの著書について、先の図1にならつて図式化を試みるな

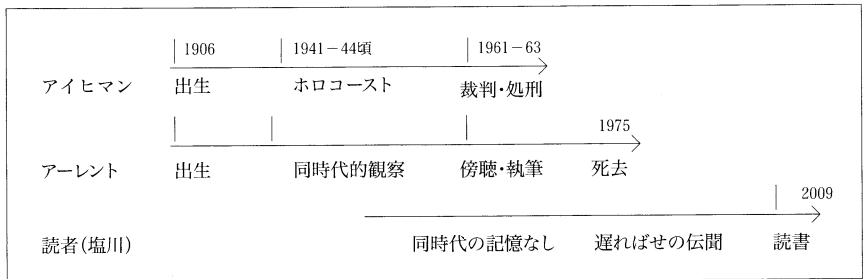
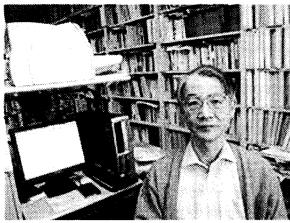


図2

ら、図2が描かれる。繰り返しになるが、アーレントはホロコーストを同時代的に注視していただろうし、そのことを一九六一―六三年にも繰り返して出していただろう。それと同時に、六一年の裁判を実際に傍聴しつつ新たな情報をも集めながら、この本は書かれた。いつてみれば、六一―六三年のアーレントは、四〇年代のアイヒマンおよび六一年のアイヒマンをそれぞれに「対話」の相手としている——もつとも、実際には「対話」は成り立たなかったというべきであり、一方的な「観察」しかありえなかったというところだろうが——わけである。いずれにせよ、そこでの「対話」もしくは「観察」の相手は、目の前で生きている——人である。

これに対し、一人の読者たる私は、ホロコーストを同時代的に見聞しなかったことはもとより、一九六一年のアイヒマン裁判についても、既に生まれてはいたが同時代的な記憶は全くない。六三年刊行当時においては、著者だけでなく多くの読者たちにとつても、生々しい記憶の対象だった出来事を扱った本のはずだが、それを半世紀近く経ってから読む私にとっては、「純然たる過去」の話ということになる。しかし、では、この本およびそのテーマが私にとって古代史や中世史と同じ程度に隔たっているかといえ



しおかわ・のぶあき◎一九四八年、東京に生まれる。一九七九年、東京大学大学院社会学部国際関係論課程博士課程を単位取得退学し、同年、東京大学社会学部研究助手。一九八二年から東京大学法学部助教授。一九九一年、いわゆる「大学院重点化」に伴い、本務は大学院法学政治学研究所、法学部は兼任という形になる。一九九二年、同教授（現在に至る）。主著『現存した社会主義——リヴァイアサンの素顔』勁草書房、一九九七年、『多民族国家ソ連の興亡』全三巻、岩波書店、二〇〇四―二〇〇七年、『民族とネイション』ナシヨナリズムという難問——岩波新書、二〇〇八年、など多数。最近著は『冷戦終焉二〇年——何が、どのようにして終わったのか』勁草書房、二〇一〇年。

そうはいえない。ホロコーストは生まれる前の出来事とはいえ、「現代史の大事件」として折りに触れ意識させられ続けてきたし、アイヒマン裁判およびアーレントの著書についても、リアルタイムではなくやや遅ればせにだが、「少し前にこういうことがあった」という形で聞いたり読んだりすることは何度かあった。自分自身にとって「同時代史」といえるほど近いかどうかは微妙だが、自分の先輩たちにとって「同時代」だったらしいという感覚を持てるという意味では、ギリギリいつば「現代史」のうちに入るわけである。

こういうことがどうして気になるかといえば、今日の若い世代にとって、「冷戦」「社会主義」「ソ連」等々は、リアルタイムの見聞の記憶がないという意味では「同時代史」でないだろうが、それでも、彼らの親・教師・先輩たちから「同時代」的な記憶をたくさん聞いていれば、間接的にもせよ「現代史」としての意識を持てるはずだが、そうなのだろうかどうだろうかという疑問があるからである。分刻み、秒刻みで移り変わる新しい動向に振り回され、「今現在」ばかりが意識の中心を占める現代社会においては、「少し前の時期」のことを思い出したり、それを若い世代に伝えたりすることが極度に難しくなっている。こうした状況は時間意識をやせ細らせ、「現代史」というものを成立させにくくしているのではないか。私がこの間、「冷戦に関する戦中派と戦後派」

というようなことを繰り返し問題にしているのは、戦中派にとつてのノスタルジックな思い出話（懐メロ）を語りたいたいなどということでは全くなく、世代ギャップの問題をきちんと見つけることが世代間コミュニケーションの前提であり、そのためには一定の幅を持った時間を「現代史」として捉えることが不可欠だと考えるからである。時間意識がやせ細り、「今現在」ばかりが重視されている世の中では、戦後派が戦中のことを知らないのは当然として、戦中派自身がかつてのことを忘れ、あるいは極度に偏った整理の仕方であつさり片づけてしまうという傾向が強い。戦後派の「冷戦」「社会主義」「ソ連」イメージが貧困なのは、それらについて戦中派があまりにも安易で図式的な語り方をしてきたせいではないかと思われてならない。

3

やや議論が先走ってしまった。アーレント著について私が前項のようなことを考えたのは、ちょうどその頃、「冷戦終焉二〇年」という主題を私が意識しつつあったことと関わる。アーレントと私とは、生きた時代が大きくずれているが、彼女がほぼ二〇年前のホロコーストについて書いたのと、私が今から二〇年前の冷戦終焉を振り返るのとでは、同じ程度の時間的距離を隔てた過去との対話という意味では似たところがあるのではないかという気がしたのである。

この作業はその後、『冷戦終焉二〇年——何が、どのようにして終わったのか』という著作に結実したが、この本においては、冷戦終焉過程だけでなく、その前の時期、およびその後の時期をも対象として取り上げた。第二章「何が終わったのか」、第三章「どのようにして終わったのか」、第四章「その後」——どのような変化が進行しているのか」という構成に、そのことが反映している。これを図示するならば、図3のようになる。図2においてはアーレントと私の世代差が大きいため、ホ

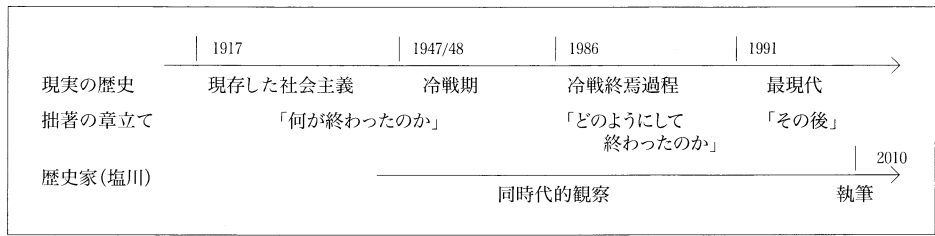


図3

ロコーストとの時間的距離感も違いすぎて、彼女の同時代感覚をそのままがものように感受するのは難しかったが、図3における執筆時の私は図2における執筆時のアーレントとほぼ同年代（彼女は五〇代半ば、私は六〇少し過ぎ）であり、そのような年齢の者にとつての「約二〇年前」の出来事の意味も、やや似たところがある。その意味で、図2だけでは著者の感覚を十分つかみかねた私も、図3の中に自分をおくことで、彼女の時代感覚を自分なりに理解できるような気がしてきた。

な意識があった。つまり、自分の歴史研究の主要対象（ペレストロイカおよび冷戦終焉）が現代史上の結節環としての意義をもつとするなら、その説明は、その前およびその後の時期に対しても重要な視点を提供するものとなるはずではないか、ということである。もう少し丁寧という

さて、一九六一—六三年のアーレントが約二〇年前のホロコーストと眼前で進行するアイヒマン裁判の双方を念頭においてその著作を書いたのに対し、二〇〇九—一〇年頃の私は、約二〇年前の冷戦終焉過程を結節環としながら（第III章）、そこに至る経過としての「現存した社会主義」の歴史（第II章）、そしてそれ以降現在までの過程（第IV章）をも視野に入れようとした。欲張りすぎた内容であるだけに、粗い概観以上のものではなく、一つの捨て石たらんことを目指したもののだが、その背後にあつた狙いをいうなら、次のよう

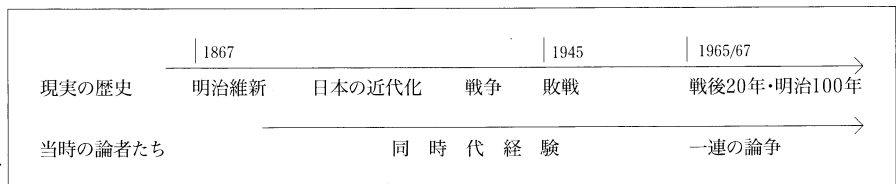


図4

なら、一九八〇年代末—九〇年代初頭の過程には、それまでの約七〇年の歴史が流れ込んでおり、その一つの決算という意味がある。と同時に、それが「どのような形で決算されたのか」は、ただ単に一つの時代が終わったというだけでなく、特定の形で終わったことの意味をも照らし出すはずであり、その「終わり方」は、その後の今日に至る過程の特徴を規定しているのではないか、ということである。

ここでまた、もう一つ別の例が想起される。それは、かつて一九六〇年代半ば—アーレントの著書が書かれたのと、大まかにはほぼ同じ時期である——に、日本で戦後二〇年および明治百年をめぐる議論が盛んになされたことである。これを図示すると図4のようになる。私自身はその当時まだ幼かったため、その論争をまともに読んだわけではないが、年長の人たちがこの問題をめぐって熱心に論争しているらしいという程度の漠然たる意識はあり、その後、「あの論争は一体どういうことだったのだろうか」という問いは長く脳裏に残った。

「戦後二〇年」と「明治百年」とが踵を接して到来したのは一種の偶然だが、この二つの主題が相互関連性をもつて議論されたことには、それなりの理由があつたように思われる。当時、二〇年前の終戦（敗戦）を振り返るとは、「手ひどい敗北に至るような無謀な戦争への道はどのようにして敷かれたのか」という問いと表裏一体だったから、敗戦および戦後への問いは、それまでの日本の近代化のあり方およびその一つの頂点としての一連の戦争へ

の問いとつながったのは当然である。そして、明治以来の日本の近代化のあり方全体に対する否定的な評価を前提に、その総体的な変革の出発点が戦後改革にあつたという風に考えると、「明治百年か戦後二〇年か」という一見奇妙な問題が二者択一の形で出されたのも理解できる。丸山眞男の有名な言葉、「私自身の選択についていうならば、大日本帝国の『實在』よりも戦後民主主義の『虚妄』の方に賭ける」⁹⁾が吐かれたのも、そうした文脈の中においてのことだった。

その後、日本の近代化についての捉え方にしろ、戦後改革の理解にしろ、また戦前・戦中・戦後の連続性／非連続性についてにしろ、様々な新しい議論が積み重ねられてきたが、その内容にここで立ち入るつもりはない。ここで注目したいのは、そうした論争の内容ではなく、むしろ論争の背後にある時間意識である。ある時点に立つて、それから二〇年ほど前に起きた大きな事件を振り返るとき、その事件は、それだけ孤立したものとして考察の対象となるわけではない。孤立した出来事なら「大事件」と呼ばれるに値しないから、それが前後の時期と何らかの形で密接に結びついているというのには、「大事件」たることの条件ともいえる。そこには、それ以前の長期の歴史が流れ込んでおり、そしてまた、それをターニング・ポイントとして、その後の歴史が大なり小なり規定される。とすれば、二〇年前の大事件を振り返るとは、その事件だけを論じれば済むことではなく、むしろその前とその後とを長期的な視座の中で振り返りながら、その結節環として位置づける作業を含むことになる。このことは、明治以来の日本の近代化―一九四五年の敗戦―戦後改革という一つのながりの流れであれ、ロシア革命以来の社会主義の歴史―冷戦の終焉とソ連の解体―その後の現代世界という一連の流れであれ、同様に当てはまる。私が前述のような内容を持つ拙著を書きながら、戦後二〇年の時期のことを思い出したのは、そうした事情による。もちろん、そうした長期的パースペクティヴの中で歴史を考えると、いったただけでは、その中味まで決定されるわけではない。日本の近代化

についても戦後改革についても種々の見方が今日に至るまで並立しており、論争が絶えないのと同様に、「現存した社会主義」の歴史についても、ペレストロイカ・冷戦終焉・ソ連解体についても、冷戦後の現代世界についても、多様な見解が存在し、それらのあいだで論争がかわされ続けるのは当然のことである。¹⁰⁾拙著執筆の動機は、「決定版」の提出などというところにあつたわけではなく、むしろ問題の提示にあつた。多くの人が、「現存した社会主義」についても、ペレストロイカ・冷戦終焉・ソ連解体についても、あたかも「常識」的な回答が存在しており、改めて問うまでもないと考えているかのような状況に対して異を唱え、改めて歴史を問い直す作業が不可欠だということを提唱したかったのである。

4

これまでに挙げた例は、アーレントの著作にせよ、最近の拙著にせよ、「戦後二〇年」をめぐる一九六〇年代半ばの論争にせよ、「その時点から二〇年ほど前を振り返る」という点で共通していた。二〇年という時間は、「近い過去」の出来事を歴史として振り返るのにふさわしい区切りだという常識的な感覚があり、私自身もそうした感覚をある程度共有するからである。しかし、「近すぎる出来事は冷静な歴史研究の対象になりにくい」が、二〇年も経てば歴史らしい歴史となり、本格的な歴史研究が開花する」と言えるかといえ、そう簡単ではない。私自身も拙著を書きながら、二〇年という時間は歴史研究にとつてまだ十分な距離ではないということを感じたし、他の例からも似たようなことを感じ

では、たとえば、ある出来事から四〇年後という時点ではどうだろうか。そのようなことを考えたのは、たまたま、小熊英二『1968』という書物に接し、いろいろな思いを誘われたからである。¹¹⁾一九六八年前

後の若者の反乱を、事件から約四〇年後という時点で振り返ったこの著作は、この問題について考える題材としてふさわしい。なお、私はこの力作から複雑な感想をいだかされたが、それについては既にやや長文の読書ノートを書いたので、ここでそれを繰り返すつもりはない。ここでは、その読書ノートで十分触れきれなかった問題を、この小文の主題と絡ませながら考えることにしたい。

小熊の書物は原著にふさわしく多面的な内容を含んでおり、図式的にまとめるのは適切でないが、そのことを断わった上で敢えて大まかな感想を結論的に言うなら、小熊は一九六八年前後の各種の運動のうち、ベ平連およびその周辺の知識人たち（鶴見俊輔、小田実ら）に最も高い評価を与え、彼らについては内在的できめ細かい描写を行なっているのに対し、それ以外の登場人物——中でも、後退期の全共闘活動家およびセクト活動家たち——に対しては評価が辛く、描写も内在的というよりはむしろ外在的・類型的なものにとどまっている。念のために断わっておくなら、私はこの評価それ自体に対して異を唱えるつもりはない。個人的には、小熊によつて辛く評価される側にかつて身を置いていたことに由来する残念な感情がないとはいわないが、それは私情というべきものであり、公的な場で長々と論じるべきことではないし、結論自体についていえば——それがやや性急に提示されている点を別にすれば——おおむね妥当だと思ふ。だが、それとは別に、問題とすべき点がある。

思想史というものは、研究者が共鳴する相手だけを分析対象とするわけではない。むしろ「自分にはなかなか理解できない、なんだか訳の分からない相手だ」という印象を引き起こすような対象をも理解しようとする点にこそ、その営みの意義があるはずである。小熊のこれまでの著作では、戦前期日本が主要な対象となることが多かったが、その時代に生きた多くの人物の価値観が現代に生きるわれわれのそれと異なるのは言わずもがなのことである。そうした人について、「この人の言動は、今日のわれわれからは肯定的に評価できない。古くさい」などといって

も、さしたる意味はない。むしろ、そうした、当初は違和感を引き起こすような相手をも内在的に理解することによつてわれわれの視野を広げてくれる点にこそ、思想史の意味があるというべきだろう。実際、小熊の一連の旧著では、そのような態度が貫かれていた。そこにおいては、研究対象となる人々の言動を、表面的な結論だけをもとにあつさりとした外在的評価を下して満足するというのではなく、むしろ一見したところ理解しにくく、あまり共感できないような人々の心情の裏にまで肉薄しようとする姿勢があつた。

これに対し、今回の著書では、ある種の登場人物に対しては深く内在的な理解に到達するための労が十二分に払われているのに対し、他の登場人物についてはそうした努力があまり払われておらず、むしろ外在的・図式的な整理にとどまるというアンバランスが目立つ。別の言い方をすれば、ある人たちは、個性をもち、裏をもった個々人として描かれているのに対し、ある人たちは集団としての平均的趨勢だけが問題にされている。

それはある意味では無理からぬことである。対象があまりにも雑多であり、その全体をきめ細かく視野に入れることがそもそも至難である上、資料の壁も大きい。当事者が書いたものの大半は、自己の思考や心情を系統的・論理的に説明したものではなく、むしろ断片的で乱雑なアジェンション的な文章ばかりが多い。そこにおいて型にはまった文章が繰り返されていることも、読む側に「紋切り型」の印象を与えることだろう。より読みやすい材料としては、周辺にいたジャーナリストの観察や、後に運動を離れた人たちの事後的な説明の文章があり、小熊もこれらを大いに利用しているが、これらを主たる材料としたのでは、内在的理解など試みようもない。前者が当事者自身の声でないことはいうまでもないし、後者には、自分の運動離脱を正当化するために、殊更に運動の内部事情をおとしめるという意図がしばしば含まれる。こういうわけ、小熊ほどの俊英が、この主題についてだけはその繊細な神経を十分

發揮することなく、内在的理解を欠いた叙述をしているのは無理からぬこととうなずけるのだが、ここにはそれだけでなく、もう少し別の事情も関係しているのではないかと思われる。

一九六八年の出来事と小熊の時間的関係を、読者たる私自身も含めて図示すると、図5のようになる。一九六二年生まれの小熊にはもちろん六八年それ自体に関する同時代的記憶はないだろう。しかし、では彼にとって「六八年」とは純然たる過去のことで、彼自身の生きてきた時代と一切関わりはないのかと言え、そうではないはずである。私はこの本の読書ノートを書いた時点で、この点について漠然たる疑問のようなものをいだきつつも、明確な答えが見つからなかったのだが、その後、彼と高橋源一郎の対談「1968から2010へ」を読んで、その答えを見出したような気がした。その対談で、彼は次のように述べている。

「私は八〇年代がいちばん自分の青春だった人間なので……違和感というのがいちばん強かったんじゃないかと思うんですね。だから、自分が当事者だった八〇年代の状況に対して、今から振り返ってみて異議を申し立てるといふ部分が前面に出てきたという部分があるんじゃないでしょうかね。

……

その当時から連合赤軍や何かに対して過大な意味付けをして、『さみたち、そんなことをやってると連合赤軍になるよ』というような言い方をしてくる人たちに對して、そんなことないんだと言いたかったというのが、後まで尾を引いてこうなったというのがありますよね¹⁵。

これはよく分かる。そのことを図5では、一九八〇年代における六八年問題の「後遺症」とそれに対する小熊の「批判的観察」という風に記してみた。この表現は十分適切でないかもしれないが、それはともかく、小熊にとって「一九六八年」は単純に「自分と関わりない遠い昔の

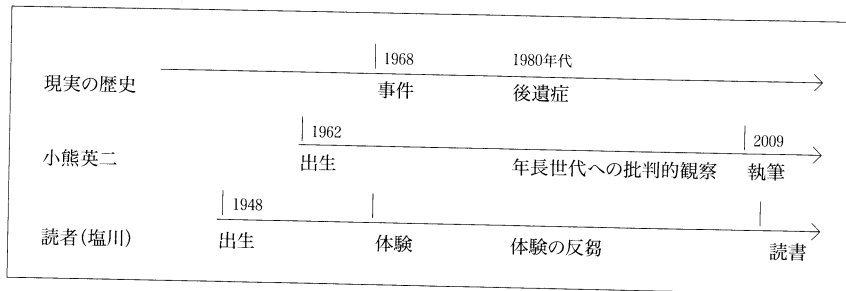


図5

こと」ではなく、「自分の青春期に、奇妙な形で後遺症を残し、それと対決しなければならなかった相手」というような意味をもっていたのではないか¹⁶。そのような対象について書くということは、古代史や中世史のような意味での「遠い過去」の歴史ではなく、論者自身の人生行路と間接的にもせよ関わるという意味での「同時代史」(現代史)である。

ある歴史書がその登場人物(の一部)に対して内在的な理解を欠いているなら、それは思想史としては一種の失敗といわざるをえない。しかし、対象との距離感という問題に悩まざるを得ない現代史(同時代史)という分野においては、これは不可避のものとも思える。もつと昔の人を相手にする場合には、「自分はこんな風に考えたり、生きたりしない」という違和感があるのはむしろ当たり前の話であり、そのことを出発点としつつ、「このように自分には理解しにくい人を、どのようにしたら、よりよく理解できるのだろうか」という問いを發して、相手に迫っていくはずだが、なまじ相手とある程度の近さがあると、そうした相手を内在的に理解しようとするよりもむしろ、「自分が当事者だった状況に對して、今から振り返ってみて異議を申し立てる」、「そんなことないんだと言いたい」という気持ち先立つことになりやすい。事件から四〇年後に書かれた書物でさえも、こうした問題につきま

とわれているとするなら、「四〇年」と

いう時間は、距離をおいた冷静な歴史研究にとってまだ十分な時間ではないのかもしれないとも思えてくる。

いずれにせよ、著者が対象に対してこのような距離感をもっているということを念頭におきながら、それとは異なる距離感をいだいている読者たる私が本書を読むのは、複雑に交錯した対話ということになる。そこにおいて、論及対象の一員だったことのある私は、自分の属した集団が内在的に捉えられておらず、ひたすら外在的・図式的に片づけられていることへの不満や抵抗感をいだきながらも、「彼にとつてはそのように見えるだろうな」という風に理解することは何とかできる。これは、一種独自の対話のあり方ということになるだろう。

おわりに

ややとりとめなく、いろいろな事例を取り上げてきた。一般論として歴史が現在と過去の対話であり、読書が読者と著者の対話である——その書物が歴史書である場合、読者は著者と対話するだけでなく、そこで描かれている過去ともまた対話する——というのは、ある意味で当たり前の話であり、また現代史に限られたことではない。ただ、現代史においては、対話がどのような時間の距離を隔てて行なわれ、それに伴ってどのようなペースペクティヴのもとに相手が捉えられるかが、時間の経過とともに急速に変化し、また世代による差異も大きいという特殊性がある。そのため、自分と相手の間にどのような距離があるのかを自覚することが難しく、そのことがコミュニケーション不全の原因となりやすい。一般に対話における誤解はつきものだとはいえ、可能な限り、自覚的な距離感をもつて対話に臨むこと、そこそがコミュニケーションを意味なものとする条件だろう。このことは、現代史を書き、あるいは読む際に、常に念頭においておくべきことのように思われる。

【注】

- (1) 塩川伸明『二〇世紀史』を考える』勁草書房、二〇〇四年、第一章、引用箇所は六頁。
- (2) 最近刊行された遅塚忠躬『史学概論』（東京大学出版会、二〇一〇年）は含蓄の深い名著だが、現代史というものの特異性が十分際立たせていないように思われる。このような練り抜かれた著作に対して修正を提起するのは不遜な試みだが、史学一般に対する現代史の特異性について私なりに考えてみたいという気持ちをかきたてられたのは、同書の刺激によるところが大きいことを記しておきたい。
- (3) Hanna Arendt, *Eichman in Jerusalem: A Report on the Banality of Evil*, Penguin Books edition, 2006; ハンナ・アーレント『イェルサレムのアイヒマン——悪の陳腐さについての報告』みすず書房、一九六九年（新装版、一九九四年）。
- (4) ラウル・ヒルバーグ『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』（原書初版は一九六一年、邦訳は柏書房、上下巻とも一九九七年）。
- (5) 詳しくは、アーレント著についての読書ノート (<http://www.shokawaja.jp/kyoac.jp/ongoing/books/>) 所収) を参照。なお、このノートは、若干の改訂の上、『民族浄化・人道的介入・新しい冷戦——冷戦後の国際政治（仮題）』有志舎、近刊に収録予定である。
- (6) 塩川『二〇世紀史』を考える』、七頁、同『冷戦終焉二〇年——何が、どのようにして終わったのか』勁草書房、二〇一〇年、一八一—一九頁。
- (7) なお、この図には読者が書き込まれていない。どのような読者がどのような時点でどのように拙著を読んでもくれるかは、大いに気になるところではあるが、ここでその点を云々することはできない。
- (8) この図にも読者が書き込まれていない。私自身は、当時はまだ子供で、読者の一人ではなかったし、その後にもこの問題を意識するようになってからも、きちんと読み返すということはしておらず、依然として本格的な「読者」になつたとはいえない。他の読者たちがいつ、どのように読んだかは別個に考察されるべき主題となる。
- (9) 丸山眞男『増補版・現代政治の思想と行動』未来社、一九六四年、増補版への後記、五八五頁。
- (10) 「明治百年」と「戦後二〇年」を二項対置し、前者を否定して後者を肯定するような図式を社会主義史にそのまま当てはめると、「ロシア革命以後の七十

数年」を全否定して、全てがソ連解体で始まったというような把握になっ
まいかねないが、それは私のとるところではない。この点については、『冷戦
終焉二〇年』で詳述した。

(11) 小熊英二『1968——(上) 若者たちの叛乱とその背景、(下) 叛乱の終
焉とその遺産』新曜社、二〇〇九年。

(12) 前注5のノートと同じサイトに収録。

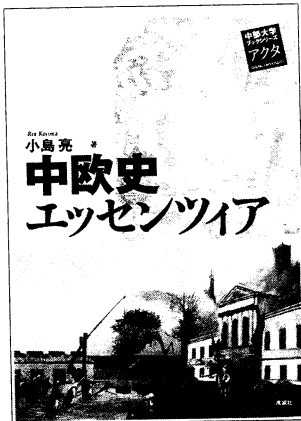
(13) 小熊英二『単一民族神話の起源——「日本人」の自画像の系譜』新曜社、一
九九五年、同『日本人』の境界——沖繩・アイヌ・台湾・朝鮮——植民地支
配から復帰運動まで』新曜社、一九九八年、同『民主』と「愛国」——戦後
日本のナショナリズムと公共性』新曜社、二〇〇二年。なお、三番目の著作で
は主題が戦後期になっており、その分、対象との距離の取り方が微妙になっ
ている。『1968』はそれをもう一歩進めたわけである。

(14) 一例として、「近代的不幸」から「現代的不幸」へという図式がある。この
図式自体は大まかな意味では一応当たっていると思う。しかし、それはあくま
でも「大まかな意味で」であって、個々の事例にこの図式を当てはめようとす
るなら、それだけでは割り切れない要素が多々出てくる。一般に図式とはそう
したものであり、社会学者である著者がそのような図式を出すこと自体に異論
があるわけではない。ただ、あまりにも何度も同じ図式が繰り返されるのを読
むとき、読者は「金太郎飴的」という印象を懐かないわけにはいかないし、そ
うした図式で片づけられている対象は、「個性」としてではなく専ら「集団の
一例」として位置づけられているといわなければならない。

(15) 『文学界』二〇一〇年五月号、一七九—一八〇頁。引用文の前半部で直接念
頭におかれているのは吉本隆明だが、より広く「六八年の人々」のその後が問
題にされていると解釈することができる。ついながら、私自身は八〇年代以
降の吉本については全く評価していないので、この点に関しては小熊と見解を
同じくする。

(16) 一般論として、人は自分の一ないし二世代程度上の世代に対して反抗し、乗
り越えようと努めるものだろう(これに対し、もっと上の世代になると、敢え
て反抗する必要も感じなくなる)。私自身、自分の一ないし二世代上の先輩・
恩師を相手取って、種々の批判を繰り返してきた。だから、自分よりも若い世
代から今度は自分が批判される側になるということは、自然な成り行きとして
受けとめなくてはならないと思う。但し、批判を受けとめるということは、単
純に迎合することではない。受けとめながら、反論を含めた対話を交わすこ
と、これは難しいけれども、努めるべきことだと思う。

東西の歴史、社会にふれる知の発見



中欧史 エッセンツィア
小島 亮◎定価1050円



放浪の作家 安藤盛
と「からゆきさん」
青木澄夫◎定価1050円



続・図書館は
だれのものか
松林正己◎定価735円



中部大学
ブックシリーズ

アクタ
ACTA

発行・中部大学 〒487-8501 春日井市松本町 1200
発売・風媒社 〒460-0013 名古屋市中区上津 2-9-14
tel.052-3310008 fax.052-331-0512 www.fubaisha.com